

現代の家族を詠む 山上憶良短歌賞の挑戦

倉吉市教育委員会教育長 中田 寛

約一三〇〇年前の奈良時代、万葉歌人山上憶良が伯耆国守として倉吉に赴任したことを記念した「山上憶良短歌賞」が創設されて、今年で十三年目を迎えました。本年度も県内はもとより、全国すべての都道府県からそして、遠くフランスからの応募も含めると、総計三〇七一首（小学生の部七一九首、中学生の部七九五首、高校生の部四七四首、一般の部一〇八三首）の応募をいただきました。心より感謝申し上げます。平成二十八年度から全国応募とさせていただいていますが、県外からの応募が一五二二首と約半数を占め、全国規模の短歌賞としてすっかり定着してきたこともうれしい限りです。これも選者の永田和宏先生はじめ鳥取県歌人会、山上憶良会の会の皆様の御尽力のお陰です。心より深く感謝申し上げます。

山上憶良短歌賞は、創設以来「家族」をテーマとしています。倉吉市教育委員会では、倉吉市の豊かな自然、風土、歴史、文化などに触れ、学び、倉吉に誇りと愛着をもつ「ふるさと教育」と、ふるさと倉吉と向き合いながら今後どのような生き方をしていくのかを学ぶ「キャリア教育」を一体的に展開していく「ふるさとキャリア教育」を教育の基軸として展開していますが、ふるさとそして自分自身の生き方の根本は家族にあると思います。今年の作品を見ても、親子、兄弟姉妹との心温まるエピソードや感動場面、家族でないと感じることができない空気感等を詠った作品に数多く出会いました。家族のこと、家族とのことを見つめ直すよい機会としてこの短歌大会をこれからも大切に育てていきたいと思っています。

さて、ニュース等によるとZ世代と言われる若者を中心に、SNSを活用した現代短歌ブームが到来しているようです。俵万智さんは、「SNSは短い言葉で発信する場所。三十一文字の短歌との相性や親和性はとても高い」と指摘し、「コロナ禍で人と会うことが難しかった分、自分と向き合う時間や興味があるジャンルに挑戦できる時間を持つことができた。その中で短歌に出会った人も多いのではないか」と分析しています。慌ただしく過ごす中、小さな気付きや感動に立ち止まり、言葉にのせてみる。一三〇〇年前、憶良の時代の人々も、もしかするとそのような心持ちで歌を口ずさんでいたのかもしれない。

倉吉市教育委員会は、山上憶良短歌賞が、家族をテーマにした現代の短歌賞として、様々な方から愛され、これからも注目される短歌賞となるよう発信を続けてまいります。今後とも皆様のご支援、ご協力をよろしくお願いいたします。